

「マル八という植物」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

先日、NHKの番組で小笠原諸島の母島の自然を特集していた。その中で特に印象に残ったのが、「マルハチ」という植物である。「マルハチ *Cyathea mertensiana*」は俗称でも地元の通称でもなく、正式な和名である。木性のシダ植物の一種だ。シダというよりは、見た目は樹木である。幹から大きな葉(葉柄)が落ちたあとが、漢数字の「八」を逆さにして〇で囲んだように見えるので、「マルハチ」という名になった。誠にストレートな、いい和名だと思う。一度、小笠原に行って実物を見たいと思っていた。

ところが、番組放映の翌日に行った、「花の博物館」の亜熱帯温室で、さっそくこの「マルハチ」に出会うことができた。



ヒカゲヘゴは大木なので、一見シダ植物には見えない。しかし、今の季節、巨大なワラビかゼンマイのような新芽が出るので、やっぱりシダ植物なのだと実感できる。この芽は、芯の部分を利用にできるらしい。



「ヒカゲヘゴ」 *Cyathea lepifera*

正確には「マルハチ」ではなく、「ヒカゲヘゴ」という種類である。「マルハチ」と同じ *Cyathe* (ヘゴ属) の近縁種である。この温室では最も大きく、そびえ立っている。それもそのはず、ヒカゲヘゴは「日本最大のシダ植物」なのだ。残念ながら本州には自生しておらず、沖縄本島や八重山諸島に自生している。

本州では「ヘゴ」は日常生活にあまり馴染みがないが、つる性の観葉植物を支える芯として、園芸店などで売られている。あの「麩菓子」のような、硬くてスカスカの黒い棒である。



これがヒカゲヘゴの「マル八」である。本家のマルハチよりも、模様が顕著と言われている。葉柄の付け根の維管束の名残であろう。すぐそばでじっくり観察できて、大変満足だった。